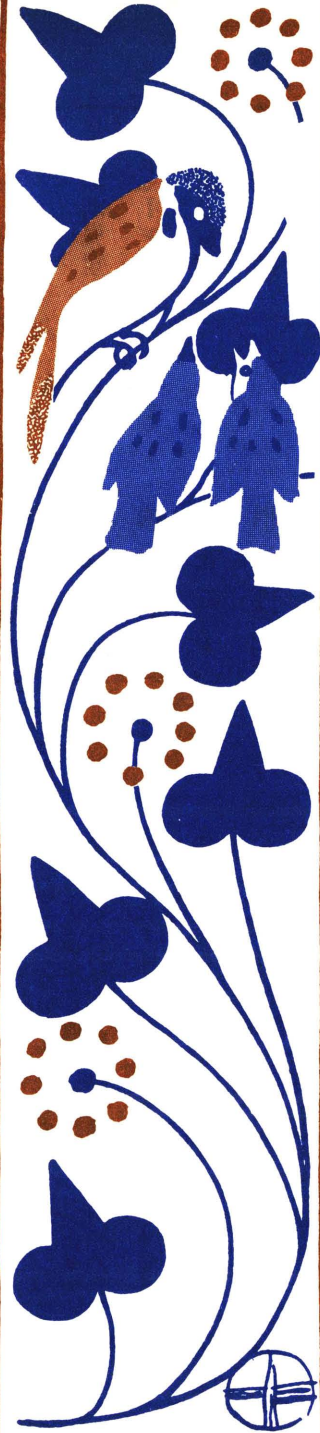


婦人子ども

第十四卷
第三號



大正三年三月五日

フレイベル會

第十四卷第三號目次

子供といふもの 巖谷季雄
人類の子供時代は何故長いか

上野陽一
學齡前兒童の發達と教養(二) 入澤宗壽

『ジェーン・アイヤ』(四) 岡田みつ

大阪の童話 浪花の子守

鯉方の準的 檜崎淺太郎

保育入門(三) 倉橋惣三

三、幼稚園

フレーベル自傳(第三回) 倉橋惣三譯

本誌定價

一冊郵稅共金拾壹錢 六冊前金郵稅共六拾錢
拾二冊同金壹圓貳拾錢 郵券代用一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に御送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

本會宛御用務

本會宛諸般の御用務は左の如く願ひます

(庶務上保姆紹介に關する件をも含む)の御手紙は
東京市小石川區久堅町七十四番地フレーベル會事務所宛

會計事務は東京女子高等師範學校附屬幼稚園内、
雨森劍宛

本誌編輯の御用務(寄稿、廣告等)は東京府下代々
木山谷一二四倉橋惣三宛

大正三年三月五日印刷
大正三年三月五日發行

編輯兼發行者 東京府豐多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四
倉橋惣三

印刷者 東京市本所區番場町四番地 登
平井

印刷所 東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市小石川區久堅町七十四番地
フレーベル會

常備せよ——ホシ小兒専門藥



シホ 小兒下痢止
 シホ 小兒風藥
 シホ 小兒胃腸藥
 シホ 小兒下劑
 シホ 小兒祛痰藥
 シホ 小兒虫藥

●小兒の體質と大人のそれとは違ふから藥も大人と小兒とは區別しなければならぬ
 ●政府の報告を見よ、小兒は一番病氣に罹り易い又死亡率も一番多いではないか
 ●然るに迄完全なる小兒専門藥のなきは政府も民間も共に遺憾とする所である
 ●賣藥改良の魁たる星製藥株式會社は茲に率先して六種の小兒専門藥を發賣するに至つた
 ●ホシのクスリは能く効く、クスリはホシに限るとの公評あり、世の親達よ明日と云はず本日直に之を求めて愛子の健全を計られよ
 ●各美鐘入一個十錢、六種箱入六十錢
 ●病原療法、藥用法、其他注意事項等を説明せる小兒醫書を添ふ

各特約店及市有名藥店にあり

有樂町三丁目一番地

星製藥株式會社

電話新橋貳貳參番 振替東京貳〇五貳貳番

兒 童 研 究

第七十卷 第五號

(大正三年一月一日發行)

(內容概要)

社會の改善も、人類の向上も、文明の進歩も、國家の發展も、詮じつむれば、たゞ善良の兒童を得るにありと言ふことになる。兒童を愛する國は興り、兒童を顧みざる國は亡ぶ、これは千古萬古變ることなき箴言である。兒童の研究は、ひとり教育家や、醫家に一任して置くべきものではない。世の父兄自ら研究すべき筈のものである。兒童の研究は即ち我を愛し、家を愛し、國を愛し、人類を愛することになる。兒童のために最善を謀らざる家庭は決して幸福を望むことは出來ぬ、我儕は何人も兒童の研究に興味を持たんことを切に希望してやまないのである。

●モンテッソーリ氏の教授用具に就て(圖畫多數挿入)

文學士 河野清 丸述

文學士 倉橋惣三 述

●兒童生活の特色

高島平三 郎述

●玩具に就て

カール、バルツ 述

●兒童期に於ける精神薄弱の認識法

スターデルマン 述

●精神薄弱者豫防

ハンス、マイエル 述

●麻疹と學校

モリツツ、ユーン 述

●母親の不注意から起る子供の病氣

醫學博士 唐澤光 德述

●子供の取扱に就て一二の注意

高島平三 郎述

兒童研究代價 一冊 金拾六錢 ○一年分 金壹圓八拾錢

發行所

東京市本郷區駒込千駄木町五〇
【振替口座東京二三九五】

兒童研究發行所

賣捌所

神田東京堂・本郷盛春堂・本郷吐鳳堂・京橋東海堂・京橋北隆館



第 十 四 卷 第 三 號

子供といふもの

(フレイブル會二月常會に於ける講演)

巖 谷 季 雄

釋迦に說法といふことが御座いますが、今日私が、皆さんの前で子供の事をお話するのは、まさしくそれであらうと思ひます、ふだん、専門に子供を取扱つて居らるゝ皆さんの前で私のやうなものがお話するのは、甚だ嗚呼がましい事ではありますが、或は多少の御參考にならぬ事もあるまいかと思つて問題を「子供といふもの」として見ました。

世間の人は、よく一口に子供といひますが、實は子供位むづかしいものはないのです。私も今まで多少子供にふれて見ましたが、觸るれば觸れるほどわからなくなります。昔から、子供について書かれた書物も澤山ありますし、兒童心理なども随分研究せられて居りますが、書物にはページに限りがある、子供には際限がないのですから、どんなに調べてもこれで究めつくしたといふ事は出来ないのです。一口に、子供といふものはかしいものだとも云へませうし、子供といふものは愚なものだといふ人もありませうし、子供といふものは可愛いものだとも云へば、子供といふものはうるさいものだとも云へませう。

しかし之れを完全に、一言にいひつくす事はなかなか／＼困難です。あらゆる子供を短時日に究め盡すといふ事は到底むづかしいのですが、たい私が目に見、耳にふれて、多少氣のついた事をお話して見やうと思ひます。

先人も云つて居る通り、大人は子供から出来るので、大人のもとには子供であります。どんなに威張つても、生れながらにして、髭を撫で、居たのでもなければ、丸髷に結つて初ぶ聲をあげたわけでもありません。私共大人のもとが子供であつたと同じく、私共の祖先も亦子供同様であつたのです。太古時代、即何千年か何萬年か以前の人間は恰度子供のやうな事をして居たのです。今日子供にして居る事は、恰度、その時代の有様をくりかへして居るのです。

子供の喜ぶお伽噺は太古の文學です、裸體で木の葉をまとうて居た時代の文學です。「名月を取つてくれろと泣く子哉」といふ一茶の名句がありま

すが、大人はそんな事は考へません。月は地球から何萬里も距つた所にある遊星の一つである位は、何人も心得て居るのですが、太古の人は、此の子供と同じく、大空に丸くきれいに光つて居る球は、何であらうかと怪んで、いろ／＼の想像を逞うして、或は捕れはしないだらうかなど、も考へたでせう。或は、お日様とお月様はいつでも驅けつくらをして居て、お月様は小さいものだからいつも追つかけられてばかり居て、かわいさうにだん／＼痩せて、しまいには消えてしまふなど、信じて居ました。子供はその時代の人、即我等の祖先の代表者であつて見れば、大に之を尊重すべきであらうと思ひます。今日世界の各國を見ても文明國では子供を貴んで居るが子供を粗末にして居る國はだん／＼衰微して居る。日本でも此二十年來、殊に十年來、子供によほど注意するやうになつて來て玩具なども、随分新らしい工夫をしたのが見えるやうになつて來ました。文明國の中で

も、米國獨逸などの新進國が、特に子供に注意して居るやうであります。之に反して、支那や朝鮮などの下り坂の國では、あまり子供を大事にしない、支那などでは老人は非常に貴ぶのであるが、子供は決して大切にしないやうである。朝鮮などでは、子供を子供扱ひにしないのです。随分小学校などでは賢^{かしこ}さうな子供が居るのですが、子供の中から大人あつかひにする、即十三歳になると大抵結婚させる、十五歳位でお父さん、二十四五歳で祖父さんといふやうな事になつて、人間自然の發達を遂げる事が出来ないのです。之に反して日本は滿州などの如く荒涼たる土地に於ても小學校幼稚園を設け、之に寄宿舎をそなへ、親切丁寧^{ていねい}に、その發育を助けて居ります。

次に、子供と云ふものは直覺的のものであるといふ事を申上げたい、直に物がわかるのです。大人は己れの邪念に迷はされて、物の判斷を過まる事があるが、子供は正直だから、明かに物を見わ

けます、親切さうでも猫かぶりばかりと看破する、こわい顔をして居ても、親切な人には直に懐^{なつ}きます。一寸見て、本能的にわかるのであつて、子供を見る大人の目よりも、大人を見る子供の目の方が、屢々公平で正確である。それをまちがつた大人の觀察を以て、正しい子供の判斷を無視する事がある、子供といふものはわけのわからぬものなどと云つて、大人の方がよほどわけのわからぬ事をして居る事があります。

子供が大人をだますなど、云ふ人もありますが、之は大人が子供にだまされるのです。大人が自分の了見で、子供を見そこなふのです。子供は大人をだましてやらうなどと云ふわるい考はないのですが、大人ほど言語に富んで居ないから、思つて居る事を極簡單にしか云はないので、之を大人がよい加減に推斷して、とんでもないまちがひを仕出かすのです。

子供と云ふものは、物にたとへれば鏡の様なも

のです。しかもきれいに磨いた鏡のやうなものです。何でもそのまゝそこへ映つるのです。それで「尊い寺は門から知れる」といふやうに、子供を見

れば大抵その家庭の仕つけ方も、學校の風儀もわかります。そして、その映つたのが一時限でなく永久にのこつて居て、いろいろの時にあらはれる。

大人がよく子供に小言をいふのですが、往々自分の影を捕へて罵つて居る事があるのです。たとへば、一日お父さんが、お尻をまくつて椽側に坐つて居たとする。之を見た子供の頭に、その姿がのこつて居て、他日その通りにやつて見る、忽ちお父さんのお目玉を頂戴するといふ順序になるのです。こんな事は形式の上の事です、往々大切な性質の上に好ましからぬ影響を來す事があります。「此の子は、男のくせに、氣ばかりもんでほんとうに神経質で困つてしまふ」など、いふお母さんが、實はいくらかヒステリーの、子供の前でもつも泣き言をいつてきかせたり、むやみに氣をも

んで見せたりして居る事があるのです。ですから大人が子供を叱るのは、寧ろ自分で自分の影を罵る様なものです。

それから子供と云ふ者は、多くの場合、現在主義で過去や未來の事は考へないものです。例へば顔を洗つたり、藥をのんだりする事をいやがります。大人なれば、顔を洗へばきれいになるとか藥をのめば病氣が快くなるとか、未來に希望をもつて、當座の不愉快を忍びますが、子供は現在が不愉快ならば、他を顧みる餘裕はないのです。それですから、お伽噺をして聞かすのでも、記述的にするよりも、現在的にした方が子供は喜びます。話より繪の方を喜ぶ、繪は現在であるからです。それで子供に話をするにはなるべく繪によつて、或は繪を見るやうにするのが、最適切で有効です。

子供は、自由主義のもので、また樂天主義のものです。神経質などは異常なのです。世間とは没

交渉のもので、財政困難で、お父さんの額に八字が書かれて居ても、それには頓着なく「何か買つて下さい」とねだるのが普通です。それを「何です、これほど貧乏して居るものしらないで！」など、叱りとばすのは子供の發育上甚だよろしくありません。世間から超然たる處が子供の價値であるから、之をみだりに打壊さないやうに注意する事が大切であります。子供の時分からあまり俗情に捕へられて、神經衰弱的に成人するなどは、國民性情の上から云つても面白くない事であるし、第一、子供の自然に反して居るのです。「武士は喰はねど高楊子」といふ事が子供に對してはあつてほしい、世間に對してはどうでもよいが、子供には、なるべく大きな事を云つて、心持ちを大きく育てたいと思ひます。

また、子供と云ふものは意志が強い、思ふ事は何でも貫徹しやうとします。それで駄々をこねる腕白をやるのですが、駄々や腕白は甚だもてない

「此子はほんとうに強情な子だ」とか、「仕方のない」とか云ふことになつてしまふ。大人の方から云へば、「しちやあいけない」といふ事を一度にしない子の方が便利なのですが、それはやはり子供の自然ではない。それを大人の方で、おとなしく／＼と無限におさへつけて矯めやうとすると、遂に意氣地のない偽善者のやうな人間を作りあげるやうな結果になる。大人の方で子供の意志の強い處を貴んで、妄に之を摧かなひやうにしたいものです。棟梁の材も若木の中に頭をおさへられると遂に盆栽に化し去るのです。

後に徳川三代將軍となつた竹千代は、なか／＼の腕白者でいろ／＼のいたづらをやるので、殆どもてあまされて居た。ある元旦の試筆に大きな紙を疊一ぱいにひろげて龍といふ字を書いた。ところがあまり大きくかいたのでしまいの點のうち所がなくなつた。どうするかと見て居ると、終りの筆をはねた勢猛に、疊の上にぼたりと大きな黒點

をうつた。之を見て居た一人の家老が、これでこそ徳川の礎はかたまるであらうと喜んだといふ話があります。小さな事に頓著なく己れの意志を貫いた處が面白いではありませんか。

一般の家庭でも、「それ障子をやぶいちやいけない」「それ襖にさわつちやあならない」とあまりこせつかぬやうにありたいものです。子供の將來を考へたならば、たゞきこわす障子位、別に作つておいてやつてもよい位だと思ひます。

子供といふものは多角形のものです。どの方面にも熾な意志で發展しやうとして居るものです。新奇な事を喜ぶと同時に、一方では、舊い習慣を好むものです。或は保守主義でもあり、また、進歩主義でもあるものです。お話でも舊い方を喜ぶ自分の方がよく覺えて居ても、やつぱり、あのお話をして頂戴といひます。好奇心が盛なと同時にかういふ保守的な處もあるのです。これが子供の性情の兩方面であるから一部分のみを見てはまち

がひます。お伽噺を作る時にも此兩面を考へなければなりません。あまり新らしい事ばかりでは、子供の頭にわからなくなる。舊いばかりでは面白くなくなる。舊い處へ新らしみを加へるのが恰度よいのです。

次に子供と云ふものは馬のやうなものですと私はいひたい、馬が乗手をよく知ると同じやうに、子供は自分を扱ふ人をよく知つて居ます。また口はきかないが思つた通り正直に行にあらはします。大人は不正直だからうれしくなくても、時と場合によつてうれしさうな顔をして見たり、おもしろくない話でも感じたやうに聞いたりするが、子供は一切包みかくしはしない、何でも正直に表白するのです。それをむやみに、頭から叱りつけるやうな事をするとう子供に惡る智慧を與へるやうな事になります。子供は清淨無垢な貴いものなのですから、なるべくその美しい處を破壊しないやうに注意したいと思ひます。

大人が子供を大人にしやうとするよりも、大人が子供にならう／＼とした方が、大人にとつても向上になるであらうと思ふ、また、その方が子供の爲めにも、大人の爲めにもなるのです。大人は己に汚れて居るが、子供はまだ清い者であるから清い物を汚さうとあせるよりも、子供に教へられて清められやうとする方がよい、大人は罪惡の塊かたまりであるからせめて子供に接して居る間、之に倣ならうて善人にたちかへるがよいと思ひます。この意味に於て、始終子供に接して居らるゝ皆さんは幸福であります。

くりかへして申しますが、子供は決して大人でないといふ事を忘れぬやうにしたい、これは至極見やすい事であつて、しかも往々忘却せらるゝ事です。即ち大人の頭で子供を判断しやうとしがちのものです。

私は、如何に子供を取扱ふべきかについて質問を受ける度に、「あなたは子供がおすきですか」と

反問すると同時に、「あなたは子供になれますか」と尋ねます。「子供は好きです」と答へる人は澤山ありますが、子供になるのはどうすればよいかわからぬ人も多くあります。自分が子供になつて子供を取扱ふでなくては、障子ごしに話をして居るやうなもので徹底しない事が多い、自ら子供になつてしまへば、直に子供に觸れる事が出来るから子供も喜んで之に懐なつくのです。子供になるといふ事は必しもむづかしい事ではありません、赤ん坊に物を食べさせる時に「うま／＼ですよ」と、まづ己れの口をあいて、赤ん坊の口をあけさせる、あの呼吸でよいのです。自分の口をしつかり閉ぢて居て、いくら「お口をおあけ／＼」といつても無駄です。子供を取扱うて居らるゝ皆さんは必ず子供になり得る方々であらうと思ふ、少くとも、子供に接して居る間だけは、子供になつて、子供と共に遊んでいたいと思ひます。

獨逸のウイルデンブルグが「現世の樂園は子供

の社會なり」と云つて居りますが、これは名言と思ひます。どうぞ、皆さんは此楽しいお仲間の一人になつて、子供を扱ふて下るるやうにくりかへし御願ひいたします。

溺れるものを救ふには、自ら水中に飛び込まなくては、その効を奏する事は出来ないのであります。

* * * *

人類の子供時代は何故長いのか

文學士 上野陽一

一
原生動物のやうに、極簡単な動物になると、人間などに比べて見て、餘程趣きが違ふ。生れるといつても、母細胞が分割して二つになると、その二つが各獨立した生物になるに過ぎない。併し生物として存在して居る間に、少しも進歩とか發達とかいふ現象を見ることが出来ない。稍發達して簡單なる神經系統を有するものでも、生れるとすぐに、自分のことだけは自分で世話をして、死に至るまで大した發達をしない。生れると同時に、

種々の能力を具へて居るのであるから、始めから大人——動物に對して大人といふのも可笑しいが——として生れるのである。随つて子供といふ時代がない。先祖のやつて來たことを、反射的自動的にやつて行けるやうに、ちゃんと神經系統の方に準備が出來て居るのである。

併し今迄になかつた新しい境遇に順應して行くには、祖先の遺傳だけでは足りない。そこで個體の進歩といふことが必要になつて來る。今迄は祖先の遺傳を保存して行くための神經系統であつた

が、今度は新しい境遇に對して順應を營むための中樞が必要になつて来る。勿論この生後の發達といふことも、極めて徐々たるもので、鳥類位になつても、大部分は遺傳に基づいて行動して居るのである。新しい事件に對して、一々相當の裁量を與へて行かなければならぬ大會社の重役などの仕事に比べて見ると、鳥類の生活などは極めて簡單なものである。人間の胎兒としての生活は、約十月であるが、かやうな短日月に於ては、到底複雑なる行動をするだけの用意は出来るものでない。こゝで下等動物は生れると直ぐに親のなし得ることはすべてなし得るに反して、人間に於てはその中の幾分を繼承するのみで、その他は生後の經驗を俟つて次第々々に成熟して来るのである。この時期が謂はゆる「子供」と稱する時期である。

二

動物が進化するに従つて、身體の構造は複雑になり、之に平行して精神作用も複雑になつて行く

が、今一つ面白いことは、動物が進化して心身が複雑になるにつれて、謂はゆる子供の時代が次第に長くなつて來て居るといふことである。雞の雛の如き、生れてから當分は親鳥の保護を必要とするといふものゝ、生活に必要な行動は、大部分は既に誕生當時に出來上つて居る。犬の子でも猫の子でも、生後當分は隨分他の保護を必要とするが、それかといつて、その後經驗によりて新たに覺える事柄は極僅である。人間以外で子供時代の一番長いのは恐らく類人猿であらう。オラングの如きは、一個月位獨りで起つことが出來ない。色々のものに握^{つか}まりながら、立つことの御稽古をする様は丁度人間の子供そのまゝである。アフリカや、印度アーキペラゴに居る尾なし猿の如きは、生後二三個月間は、歩くことも出來ず、自分で物を食べることも、精密に物を握ることも出來ないとのことである。然るに普通の猿は二三ヶ月も經てば、歩くことも掴むことも、十分に出来る、

即ちそれだけ子供時代が短いのである。

然るに人間になると、子供時代が非常に長くなり多年之を愛撫哺育してやらないと、獨立の生活が營めない有様である。而して如何にその取扱が深切丁寧を極めても、人類の三分の一は五歳に達する前に死滅しつゝあることは統計の明らかに示す所ではないが。子供時代といふ意味を他の保護を要する時代と解すれば、人間の子供時代は十二三歳までゝあらう。蓋し十二三歳になれば、無理に獨立の生活が出来ないこともないからである。併し可塑性、可教性のある時代を子供時代と解すれば、青年期までも子供時代に數へなければならぬ。

然らばこの子供時代なるものは、心理學上如何なる意義を有するものであるか。これはつまり獨立の生活をなすために必用なる準備をなす時代である。故にその個人の生活すべき社會が複雑であればある程、それに順應して行くには、長い準備を

要する譯である。そこで人間の子供時代は、動物のよりも長く、同じ人間の中でも、未開人よりも文明人の方が長い。文明人の社會でも中流以上の子弟になると、生後二十五年も経過しても、まだ父兄から學資を貰つて、この準備のために時間と勞力を費さなければならぬ有様である。生理的に春情の發動は既に十四五歳頃に始まつて居るのに、その約二倍の年月を経なければ獨立生活の準備を終ることが出来ない。それが現今文明社會の常態である。幼稚園から大學を出るまでには、どうしても二十五歳から三十歳にはなるが、心理上からいへば、皆子供時代と見做すべきものである。即ち子供時代は從屬の時代準備の時代と稱することが出来る。

三

人間に子供時代があるために、文明はどの位進歩したかも知れないし、又逆に文明が進むに従つて人間の子供時代は非常に長くなりつゝある。今

その次第を説明しよう。

社會學者の説明によるに、すべて政治上社會上の制度は、主として家族から發達して來たものである。然らば家族なるものは如何にして出來たかといふに、人間の嬰兒は誠に頼りないものであるから、之を保護して育てるために両親が一處に生活するといふことから始まつたのである。して見ると、社會の文明は、人間に子供時代といふものがあつて、それが次第に長くなつた御蔭で次第に進歩するに至つたといつても差支へがない。即ち人間の嬰兒が頼りない状態にあるために、両親兄弟の間には、同情の念が發達し、之れが結帶となりて長く共棲するやうになつたのである。家族が出來ると、進んで共同團體が出來た。道德史を翻いて、道德の發生退歩を考へると、道德は共同團體の進歩と平行して發達して居ることが明らかである。道德の始端と認むべきものはまづ社會的動物に見ることが出來るが、それから人間の部族生

活を経て、次第に愛他的の共同團體まで發展して來たのである。

かくの如く考へて來ると、子供は文明の中核である。「子供は夫婦のかすがひ」といふが、實は文明のかすがひである。不和・離婚・別居などが子供のない家庭に一番多いといふことは、統計の示す所である。又子供のない人は、子供のある人に比べて見て、種々の同情に缺けて居ることは人々の氣づく所であらう。殊に一人子として富裕に育てられて來た人には、この缺點が著しいやうである。故に子供時代に於ける教育の如何は、その個人の盛衰と關係があるばかりでなく、社會全體の興亡と直接關係を有することである。かくの如くして子供時代の長いといふことによつて次第に文明が發達して來る一方には、文明の進歩が原因となつて我々の子供時代は次第に長くなりつゝある。蓋し社會の進歩は境遇が複雑となることを意味するのであるから、その境遇に順應するための準備をなす

子供時代が次第に長くなるといふのは、自然の勢である。社會の發達と共に、義務教育の延長されて行くのも、全くこの理由に外ならないのである。近世文明社會の一員として、十分之に順應して行くためには、長い間各方面から種々の教育を受けなくてはならぬやうになつて來て居る。殊に頭腦を

使用する仕事を以て世に立たんとする人は、長い子供時代を経過しなければならぬ。人生五十といふが、文明の進歩はその半以上を子供時代として過ぎなければならぬやうな形勢を齎らして來た。種々の社會問題は多くこゝから起つて來る。

學齡前兒童の發達と教養(二)

文學士 入澤 宗壽

三、模倣及び社會化の時期

(二歳の始より三歳の終りまで)

此の時期の状態と一般的特色。兒童は今や各種の感覺と周圍の事物とに馴れて、茲に周圍のものの中でもつと變化の多い事物特に人間から新しい經驗を得やうとするに至る。外界の事物は多く靜止して居るから、早くその特質を了解するが、人間は活動して居り、變化があり、且事物のやうに

兒童の思ふまゝにならないから、絶えず興味を起させ、且興味を段々と増して來させる。

第一期よりも大に複雑な模倣が起り又それが正確になされるのは此の第二期の特色である。聲の調子や、笑ひ、叫び其他顔面の表情が模倣せられる。これは一年半位の女兒に於て最も著く行はれる。此の模倣本能が遊戲及び好奇心の本能と聯合して此の二年間に兒童は人間として意識を持てる

動物となるのである。

此時期に家庭の關係から離された兒童は、如何によく注意されても不完全なる發達しかなし得ない。これ家庭の親密なる關係に於ての個々の人との觸接を缺くからである。通常の家庭に於ては兒童は此二年間に言語を覺えて家庭てふ小社會の一員となり、家庭内の人々と及び他の二三の人と色々な社會關係を形成する。此時期は實に家庭の陶冶的影響が最も著しく働く時期であるのである。

模倣と社會意識。模倣は此の時代に最も著しく

働く作用であつて、これが或る度まで兒童の好奇心と遊戲心とを支配する。兒童がなす行動の大部分は多く他人の行動から示唆されるものである。

模倣の傾向が如何に大なるかは彼が苦痛を感じることも再三再四それを繰返すのを見てもわかる。例へば汗が暑くて非常に苦痛を感じても他人がこれを飲むが故に我慢して自分もそれを飲むものである。

表情は最も早くから模倣せられて、從つてそれに伴ふ感情も或る度まで兒童に感得せられる。

かくて兒童は他人の行動よりもその精神狀態を認知し得るやうになつて、茲に物質的刺激よりも一層社會的、精神的影響を受けるやうになつて来る。最初は唯客觀的に模倣したものか或る度まで精神的に模倣する。兒童は、目的にも本能的にも一の社會的存在物であつて、彼が周圍の社會的及び心的刺激から多大の影響をうける。模倣は行動を學び知識を收得するに大なる助けをなすものであるが、それよりも兒童を心的環境に引き入れ、その精神的生活を形成する事に一層多くの働きをなす重要な作用である。

共通意識と社會的感情。此の第二發達段階に於ては最初は自己と他人とを區別する自我意識なるものは存在しないで、寧ろ他人と共通な意識を持つて他人がする事に引き入れられる。笑ふこと乃至食ふことでも非人格的で他人のした事を自分が

した事のやうに感じる。斯かる状態は通常の場合
は一年間、或る場合には二三年も續いて居る。兒
童は周圍の人が樂しむものを樂しみ、自分の樂し
みを他人が樂しむ事を望み、自分の苦しみは他人
の慰めに依つて止める。この時期に於て他人の愉
快と賞賛の表示は或行動を續けるに最も大なる刺
戟となるものである。此の状態が快活と内氣の生
ずる點で前の段階に於ては新事物と始めての人間
には恐れを感じるに過ぎなかつたものが、此の段
階には始めて逢ふ人からの賞賛非難を氣遣つて行
動するやうになる。此の時期に社會的刺戟に感じ
易い兒童にして不適當な非難の經驗を多く有した
場合には不幸なる生涯の結果を残すに至るもので
ある。

或兒童は羞耻と見えを張る兩方面を持つて居る
が、兒童の中にはこれらの社會的感情を全く缺い
で居るとか又はその發達が晩くてこの時期には他
人の賞賛に全々無頓著なものがある。彼等は身體

上の愉快を與へるか苦痛を蒙らせるでなければ一
向動じない。かゝる兒童は一見、動物と同じ賞罰
の手段によるの外ない様であるが、此の社會的感
情の缺乏は、兒童の周圍に居る人々の不親切な取
扱ひや表情の缺陷に本づくか又は社會的經驗が多
過ぎて心的發達を後れたものである。こんな場合
は家庭の中で育つた子よりも孤兒院等の建物の中
で大きくなつた兒童に多い。

社會的觀念と自我觀念の發達。兒童は此時期に
於て夙に個性を示し客觀的の事物にも社會的影響
にも屢反對をなすけれども、この際に個性は意識
的のそれではない。兒童はこの時その精神的狀態
を他人及び他物と共有して居つて、自他の區別が
分明でない。自我觀念の發達に大なる働きをなす
ものは言語であつて、兒童は人名によつて他人と
自己とを區別し又それが事物との區別をもなさし
める。「吾」汝等の言葉がこの方面に役立つ。

品性の萌芽特に感情的生活が發達するものは此

の共通意識の時代に於て著しい。兒童は他人がな

ある。

す如くに發動し、周圍の人の音調や身振りにあら

かくして此の時期に於て最も重要な二つのも

はれた感情を或度まで自分にも引受ける。恐怖の

のは(一)兒童と其の周圍の人々との愉快にして同

如き、かくして此の期に外部から教へられる事が

情に富める關係(二)望ましき行爲の習慣形成に都

多い。世間では屢々本能とせられ先天的のもの

合よき一致的狀態及び取扱である。而してこの期

せられる多くの特質は明らかに此時期中に周圍の

間には服従といふことは意識的の執意といふより

人の行動から取り入れられたものである。それが

は一層習慣上の事柄たる可きものである。

自覺的に記憶には残らないでも、印象の結果が残

言語の收得と觀念。一層特殊的、個性的な共通

つて永久に性格の中に組み入れられる。恐らく生

意識が取り入れられる媒をなす言語が大速力で收

涯中に於て、此の時期ほど即ち他人の精神生活を

得されるのは又實に此の時期の間である。共通意

取り入れる此の期間ほど兒童の感情性に取つて従

識の感情的方面は自然的の表示の媒によりて發達

つて品性の基礎に取つて重要な時期は無いので

するが、その知的方面はそれよりも一層人工的な

あらう。兒童を取り圍める人々の精神や、家庭の

言語が收得される事に於て發達する。かくして話

風儀等が最も深く兒童の性質中に這入り込んでそ

す事を學ぶのと知力の發達とは甚だ密接な關係に

の一部を形式する事の著しいのは他の時期には見

立つものである。

ない所である。かくて身體の健康は、身體のため

兒童は他人のなす事及びその精神狀態を受け入

のみで無く、感情、氣質、性格に關する生理的動

れる場合に唇の動き方、聲の具合に注意してその

搖の結果として此の時期に大に注意を要する所で

行動と音聲とを模倣する。かくして他人の意識を

受け入れる新しき方法が茲に開ける。言葉を話すことは最早や單なる口の遊戲ではなく又餓と望みを訴へる手段のみでなく、精神上の經驗を取り入れる手段となつてくる。

兒童は一方事物と行動の名を求めて自分の單語を殖やすと共に、他方他人の言語が絶えず彼の注意を惹起して茲にその觀念が數を増し、又その意義と關係とが漸次明瞭になつて來る。言語がなければ兒童は動物の如くに一定の小數のものしか知らない譯であるに、言語によつて彼は周圍にある凡ての事物を學び、それから他の所にある類似の事物を知り、同一と差異を知り、茲に一つの精神内の組織を形成するに至る。かくて他の動物や前期の狀態から全く進んだ存在物となるのである。

知覺と心像。知的發達から見て此の第二期は言語收得の時代たると共に又感覺的知覺と心像形成の發達について著しい時期である。前の時期に於ては事物は一定の場所に於てのみ知られるので例

へば兒童に取つて最も大切な母の胸の如きもたゞ觸接することに依つてのみ認められ、母自身は觸覺音聲や身振によつてのみ母たるを認めて全體の母の形に就いては何も知らないのである。然るに一年が終るに頃なれば、兒童は各感官で同一化することを覺え、漸次何れの感覺を通して認識するやうになる。

各感官に於ける知覺の聯合も亦社會的暗示から來ることが多い。他人の行動によつて示される特色が兒童の對象の方面を定める。善良・快適・美麗・危險等の觀念はかくして社會的暗示によつて或點まで形成せられる。言語も亦社會的暗示の重要な手段で、これに依つて兒童は感覺的知覺の發達に於て動物を超ゆること多大の域に達するのである。

兒童に於て、最初は他人から言語を話されて後に腦の活動が起るのであるが、後には事物によつて直接そのものゝ觀念が精神の中に起つてくる。

かくして後には言語や事物によつてのみで無く他の心像からも或心像を喚び起すやうになる。此の發達時期に至れば斯かる實物から離れた心像が形成せられて兒童は千も二千もの言葉覺えるやうになるのである。固より是等の觀念は特殊の經驗から離れたものでは無く、前の經驗と結び付いて居るのであるが、これら日常の經驗を土臺にしてお話の風につゞければ、此の期の後半に於ては兒童はその話を辿り得るものである。

記憶。此の時期中、習慣が大に形成せられるもので記憶といつてもそれが果して意識的習慣以上のものであるか否かを決定することは困難である。併し、三年の終りに近けば數日前、數週前若しくは數ヶ月前に起つた事柄でも、それを話し得るのを見れば、これは明らかに眞の記憶であつて時にはそれがずつと後までも記憶せられる事がある。たゞし通常は三年以前の記憶を有する人間は稀である。

想像と思考。兒童が心像を形成する能力の發達につれて、直接の感覺的刺戟から獨立して過去に最も興味を惹いた經驗を再生するやうになり、此の内的活動が此の時期に漸次盛になるが固より次の時期ほどは著しくない。かくて兒童は認知して暫く經た後にそれを模倣することを始め、漸次それが演劇的になつて單に再生するのみでなくなる。かくして此の時代にも自己の經驗と人から聽いた物語に基いて僅かの想像のお話をするやうになる。

此の期の末には兒童の概念の數は中々多數であるが、通常は知覺的、心像的時代のものたるを免れない。併し兒童は事物を區別する事をなし、時には二三の特殊事項から概括しやうと試みるものさへある。「お父さんも行く、お母さんも行く、姉さんも行く、誰も行く」の如きがそれである。又言語上の類似差異の點から或る種の概括及び推理を行ふのも之を見る所である。固より其處に一般

的抽象的思考なるものは殆んど無いけれども、此後に於ける一層一般的で抽象的な思考の準備たる習慣及び觀念形成の發達は大に存在して居るのである。

以上カークバトリック氏が第二期について述べて居る要點を紹介したのである。これから一言これに對する教養上の注意を述べて見たい。

教養上の注意。一般に此の時期に於て注意すべきことは善良なる境遇を作つてやることである。

模倣の盛な時代外圍の人の影響を受け易き時代として最も深き注意を要するのである。品性の萌芽たる感情的作用の形成さるゝ時代として特に然りである。カ氏も説いて居る如く家庭の必要は實に古來から何人もこれを稱へたところである。ルッソがこれを閑却したのは家庭が良影響を與へないやうに腐敗し切つて居ると信じたが故に家庭から離して教育しやうとしたので、家庭の改良、母の愛の重要は彼がエミール中に極論して居る所で

ある。實際無知なお守に任せて惡影響を受けさせては何等家庭の効を見ないのである。伴侶、周圍の吟味は實に――古來見識ある人士の叫んだ所で又現時生物學社會學兒童學の理論の教ふる所である。かくて賞賛と非難、賞罰の取扱も大に考慮を要す可きものとなつて来る。理想論者はこれらの手段を毛嫌ひするけれども、個性によつては體罰も必要で、又賞が倫理的に價值がないとして排する如きは嚴肅說に捉はれたものである。兒童は功利論者である。故に最初は幸福論で導いて行くのが正當である。たゞその目的と到着點は唯心論にあること忘れなければ宜しい。賞賛と非難との効果多きことはカ氏も認めて居るが、これは十七八世紀に於て多くの教育思想家が系統的でなくとも兒童觀察に基いて極言して居る所である。吾人は飽くまで形式倫理に捉はれないで兒童の發達段階に伴へる取扱をせねばならぬ。

知育の方面に就いては之れと或は反對したとも

思はれる注意を力説したい。といふのは兒童をあまり見くびらぬことである。或論者は思考作用の如きは最も遅く發達するもので兒童には思考がないとさへいつて居る。併しカ氏もいへる如く論理的思考の萌芽は此の期にも明らかに認める所で、區別と比較てふ根本の作用はこの時から注意してやらねばならぬ。固より發達に叶つた取扱が重要ではあるが、この時代から明晰なる思考の基礎を作らなければならぬ。といつて決して難きを求めるのではない。感官の練習と共に感覺を土臺に置いた思考の萌芽の涵養に都合よき状態に兒童を置かねばならぬ。思考の發達に重要なものは言語であるから、言語に關する注意、及び事物の直觀か

『ジエーン・アイア』 (三)

|| 英文學に現はれたる子供(十五) ||

ら得る區別、比較の注意、即ち材料を提供するに努めねばならぬ。といつて固より此の期に思考の修練などは或意味に於ては不可能であるが、それを取扱者は眼中に於いて材料即ち事物の供給を豊富にして兒童の知力むしろ直觀練習の機會を造つてやらなければならぬ。一言にしていはいはゞ兒童の能力が發達しない／＼といつて手を拱いて居ないで、發達した方面を考慮に入れて分相應の取扱をせねばならぬ。かくて茲には誤れる兒童心理に捉はれないことを注意したい。詳しくいへばあまり長くなるから一般的の注意に止めて置く。次回は第三期即ち幼稚園兒童の發達と取扱とになるから、今少しく詳細に述べて見やうと思ふ。(つづく)

岡 田 み つ

ジエーンは自分とロイド君との對話から、又

シーとアボットとの物語から推して、病氣を癒さ

うとの奮發心を起こす程に、希望を聚め得た。身の上に變化が起りさうなので、ジエーンは其を樂みにして、黙つて待つて居た。が、その變化は來ないで、幾日も幾週も經過した。

ジエーンの健康は疾くに回復したのに、此子の思ひ耽つてゐる問題に就いては、少しも話が出なかつた。リード夫人は、恐い目をして時々ジエーンを視たが、物を言ふ事は滅多に無かつた。夫人はジエーンが病氣になつて以來、子供等との間を一層隔てゝ、夜は小さな部屋に獨り就寐^{やすみ}ませ、御飯も別にし、他の子供達は始終客間に出て居るのに此子だけは子供部屋で一日暮させた。それであつて、ジエーンを學校へやるとの素振りも見せなかつた。併し、ジエーンは夫人が自分を視る顔付に、前にも倍^よして、堪へがたい憎惡^{にくみ}の情が見えるので、同じ家の中に長くは置くまいと自然に見込みを付けた。

エリザとデョーシアナも、母の命を奉じてゐる

らしく、ジエーンにはほと／＼口をきかなかつた。ジョンは、ジエーンを見る度に、頬の中で舌を突張らせるのであつたが、一度手を舉げて打たうとした事があつた。ジエーンは、此前の騒ぎを引起した時と同じく、深い怨恨と前後見ずの反抗心に驅られて、此方からも對抗^{むかひ}ていつたので、ジョンは退くが得策と思つたが、嘲罵^{ちょうば}をあびせながら「ジエーンが鼻柱を折つた」と言張り／＼逃げ去つた。實際、ジエーンは指關節^{こぶし}でいやといふ程に、彼の出張つた鼻柱を狙ひ打つたのだが、ジョンがそんなに打たれても、又、ジエーンの憤怒の形相を見ても、平氣で居るので、ジエーンは此機を外さず猶も進んでと、勢ひ込んだが、その中に敵は母親の許へ逃げ了せて終つた。やがて、ジョンが泣聲で「あのジエーン奴^{やつ}が、氣狂ひ猫のやうに僕に飛び付いて」と告口を始めるのが聞こえたが、「ジョンさん、あれの事は言ふのは御止め。あれの傍へいらつしやるなど、母さんが言つたでせう。彼れ此れ文

句をいふ價值はない。御前さん方に、あんな者と一所になつて貰ひたくないのだからね。」と夫人が嚴しく窘めてゐる様子であつた。

それを聞いたジエーンは、階段の欄干から下を瞰いて、前後の考もなく、急に、

「其方から、私と一所にゐる價值がないくせに。」と怒鳴つた。

一體リード夫人は、どつちかといへば肥つた婦人であつたが、此不敵の雜言を聞くや否や、輕くと階段を走り上つて、旋風の如くに、子供部屋へジエーンを追籠め、ベッドの一端に押し付けて「其處から一寸も身動きをするな。今日中一言でも口をきくな。」と聲に力を入れて脅赫した。

「リード伯父さんが生きていらしつたら、何と仰るでせう」と、ジエーンは、殆ど知らずに言つた。

我知らずといふたのは、さう言はうと意志が決定せぬうちに、舌がその語を出して終つたので、自由意志で抑へる事の出来ぬ何物か、夫を言はせ

たのである。

「何？」とリード夫人は小聲にいつて、平常冷やかに靜かなその眼に、恐怖とも思はれる色が浮んだ。而して、ジエーンの腕を掴んでゐた手を放して、ジエーンを見入つた顔には、「之は人間の子か、其とも鬼ではないか。」と疑がつてゐる様が見えた。ジエーンは、今こそと思つて、

「リード伯父さんは天にいらしつて、伯母さんのしたり、思つたりなさる事を、皆見ていらつしやる。私の父さんも、母さんもそうだ、伯母さんが一日私を押し込めて置いたり、私を死んでしまへばよいと願つて御出の事も、皆は、承知してゐます。」と云つた。

リード夫人はぢきに勇氣を回復し、この悪い小女を非道く揺ぶつたり、耳を打つたりして、無言で出ていつてしまつた。ベシーは、暇に一時間も説法をしてきかせて、「あなた位極惡な、人に見放されてゐる人はない。」といった。ジエーンも、其

時胸中には悪い感情ばかりが湧き上つてゐたので、ベシーの言が當つたゐると自分も大方思つた。

十一月、十二月と過ぎ、一月も半ば経つた。クリスマスと新年の御祝は、此邸では例年の通りに行はれ、贈物の交換があり、晚餐會や夜の會が催された。但し、ジエーンの與つたのは、エリザとデョーリアナが日々衣服を着換へて、客間へと、薄地マズリンの服に、深紅の帶を締め、髪を美々として縮らせて、下りて行くのを見るのと、其から後、客間で彈ずるビヤノや立琴の音、給仕や取次が彼方此方へ往來する足音、茶菓の出の時のコップや皿のガチャ／＼といふ響、客間の戸が開いたり閉つたりする剋邊に漏れる途切れ／＼の話を聞くのとであつた。之にも倦きると、ジエーンは階段から身を退いて、寂寥たる子供部屋へ歸るのであつた。部屋の中は陰氣だが、さればとて、さう慘でもなかつた。正直にいへば、ジエーンは、自

分を見返つてもくれぬ來客の中へ出たいとは、少しも思はかつた。唯、ベシーが優しくして、相手になつてさへ呉れれば、男女の御客の一抔ある部屋へ行つて、リード夫人の恐い目ににらまれてゐるよりは、ベシーと共に居る方が結構だと考へた。併し、乳母は令嬢たちの御化装が濟むと、臺所とか女中頭の室とか、陽氣の處へいつて終つて、大概蠟燭までも持つていつてしまふのであつた。すると、ジエーンは爐の火の燃落つるまで、人形を膝に載せて、ちつと端座し、其薄暗い室には、自分だけで、他に恐ろしいものは居ないのだと念を推すやうに、時々四方を見廻した。餘爐がいよいよ盡きかけて、赤色が鈍つて來ると、ジエーンは着衣の駄目や紐をむやみに引張つて、急いで、寢支度をし、ベッドに潜り込んで、寒さと暗さとを凌ぐのであつた。而して、其ベッドへ、缺かさず人形を連れていつた。人間は、何か愛を注ぐものが無くては居られぬもので、ジエーンは愛するも

のに事を缺いて、色の褪めた、みすばらしい事、案山子かみだしの雛形のやうな人形を慈愛いづくしんで、僅に樂みたのしをとつた。ジェーンは、この木偶が生きてゐて、感覺があると幾分思つたので、馬鹿氣てゐる程に本氣で之を可愛がつた。それを自分の寢衣に包んで傍へ置かないと、眠れないので、それが自分の傍に無事に暖かに寢てゐる時は、さぞ心地よからうと思ふに連れて、自分までが多少慰められるのであつた。

御客が立ち去つてから、ベシーの足音が階段に聞ゆるかと、待つ間の時間は長いやうな氣がした。折には、ベシーが指拔とか鉋とかを取りに、又、さもなくば御茶受けにと御菓子をもつて、中途に上つて来る事もあつた。さういふ時は乳母はジェーンが食べる間ベッドの上に坐つて待つてゐて、食べてしまふと夜着を被せてくれて、「お休みなさい。ジェーンさん。」と優しく挨拶をしてくれたりした。ベシーがかう優しいと、ジェーンは世の中に

之程美しい親切な人はあるまいとさへ思つて、いつもかういふ様に機嫌をよくしてゐてくれて、自分を小突きまはしたり、小言をいつたり、いつも好がちのやうに、むやみに使ひ散らないでゐて欲しいと切に／＼希つた。

一月の十五日、朝九時頃の事であつた。ベシーは朝御飯に下りていつて、此家の子供達は未だ母親から召されなideゐた。エリザは帽子を被ぶり、暖い他出そとでのコートを引き掛けて、鳥の餌をやりに出掛けやうとして居た。此子は鳥を飼ふのが好きなのだが、臺所へその卵を賣つて、賣上げを貯へるのも大好きだつた。エリザは商賣氣があつて、金溜屋たろやで、卵と鳥肉を賣るばかりか、草木の根や、種子や、挿枝を強談判はげだんぱんをして園丁に賣付た。(園丁は、リード夫人から、令嬢の望みに任せ何でも買へと言付かつて居た)。エリザは、澤山利益のある見込さへつけば、自分の髪でも手放しかねないので、而してその所持金を、初の内は、古切や、紙

屑に包んで、人の氣付かぬ隅に藏したものだ、女中共に見付けられた事があつて以來、盗み取られるのを恐れて、母親に預ける方法を探つた。それをまた非常な高い――五割六割――の利子で預けるので年四回にキチン／＼と利子を請求して、精細に帳面に記入してゐた。

デヨーデアナは、高い腰掛けに坐つて、鏡に向つて髪を梳しながら、抽出しに一杯入つてゐる中から、造花だの、色の褪めた鳥の羽を取り出して、髪に飾つてゐた。デエーンは、ベシーが戻る迄に、ちやんとして置けと言付けられたので、ベッドを整頓して居た。(ベシーは近來此子を下働きに使用して部屋の掃除などをさせるので)。ジェーンは掛蒲團を擴げ、寢衣を疊んで、それから散らかつてゐる晝本や、人形の道具を片付けやうと、窓の方へいつた處が、デヨーデアナが「私の玩具に手を付けてはいけない」と急に制したので、そのまゝ止めてしまつた。他にする用事もないので、窓の霜花

に息を吹き掛け、ガラスを一部清めて、戸外の、甚い霜で氷り固まつてゐる地面でも見やうとした。此窓から、門番の宿と、馬車道とが見えるのだが、ジェーンが丁度窓硝子の霜模様を溶して、今しも外を視やうとした途端に、門がちと開いて一臺馬車が乗り込んで來た。ジェーンは、馬車が道を上つて來るのを何氣もなく見てゐた。馬車は折々此邸に來るが、ジェーンに關係のあるやうな御客の來た例はなかつた。その馬車は、邸の玄關前に止まり、案内のベルが高く響いて、新來の客は内へ入つた。自分には何の關係もないので、ジェーンは目を移して、こんどは餓ひらじさうな一羽の小鳥に注意を向けた。其小鳥は、窓際の葉もない櫻の樹に止まつて、囀つて居た。朝御飯の、パンと牛乳の食べ残しが卓子の上にあるので、ジェーンは、パンの一小片を碎いて、窓の敷居に載せてやろうと、窓枠をグン／＼引張つて居るところへベシーが階段を駆け上つて來て、

「ジエーンさん、前掛を御除しなさい！何をしたいらつしやるの、今朝、顔を御洗ひなすつたの？」といった。鳥が、パンを食べるやうにしてやりたいと思つて、ジエーンは、返事をする前に、もう一息窓枠を引張つた。窓がやつと開いたので、パン屑を窓の敷居の石の上、櫻の技などに散らして、其から窓を閉めて、

「いゝえ。今やつと掃除をしまつたところ。」と答へた。

「眞實に厄介な御子ね。今何をしていらつしやるの。惡戯をして御出のでせう。赤い顔をして。何だつて窓を開けたのですよ。」

ジエーンは、答へる勞を取るに及ばなかつた。

ベシーは、辨疏を聞いて居る暇はないとのやうに急いでゐて、いきなりジエーンを洗面臺の處へ引摺つていつて、石鹼、水、タオルで荒つぱくしかも手短かに、顔や手を引擦つて、強毛のブラシで髪を撫で付け、前掛を除させ、階段の下り口まで

せかし立て、「下の御座敷で御用があるのですから、早く下りていらつしやい。」と言つた。

誰が自分に用があるのだから、リード夫人も其處に居られるのだから、聞きたいとジエーンは思つた。併し、もうベシーは立去つて、子供部室の戸を閉めてしまつた。ジエーンは、徐々と下りていつた。もう三ヶ月も、伯母の許へ呼ばれた事がなく、子供部室にはかり閉ち籠められてゐたので、食堂の客間だのいふのが恐ろしい場所のやうに思はれて、其處へ入るのが辛かつた。

ジエーンは、今人の居らぬ廊下に立つて居た。前が座敷で、その前で怖がつて震へながら立ち止まつてゐるので、この子は不當の罰を受けた結果何事にも恐ろしさが先に立つて、此頃甚しい憶病者になつてしまつてゐた。子供部室へ戻るのも怖いし、座敷へ進むのも怖いと、十分間も苦悶し躊躇して佇んでゐると、座敷からベルがひどく鳴り響いたので、如何しても入らなくてはならなくな

つた。

「誰が私に用があるのだろう」と心に尋ねながら
兩手で戸の取手を廻しても、一寸はジエーンの方
では開かなかつた。「リード伯母さんの他に、ど
んな人が居るのだろうか、男か女か、」取手がまはつて
戸が開いた。ジエーンは、中へ入つて丁寧な御辭
儀をして、顔を上げた時に、目に入つたものは
黒い柱であつた。始めの一目には黒柱と映じたの
だが、實は丈の飽くまで高い、細長い、黒衣の人
が敷物の上に立つて居たので、その頭邊の瘴惡の
顔は、柱でいへばその頭部を飾る彫刻の假面とも
いふべきであつた。

リード夫人は、爐の傍の平常の場所に席を占め
てゐて、手眞似でもつと近くと知らせたので、ジ
エーンは進み出た。

「之が豫て御話してあります少女で。」
と、夫人はその石のやうな人に、ジエーンを紹介
した。

その人、男なので、は徐ろに、首をジエーンの
方へ向け、瑕を探しさうな眼を太い眉毛の下から
光らせて、さん／＼熟視で、嚴かに低音で、

「形は小さい。幾歳ですか。」

「十歳。」

「そんなですか」と疑ひ深さうに答へて、又暫時
検査を續けた末、ジエーンに向つて、

「名は何といひますか。」

「ジエーン・アイアと申します。」

と答へると、同時にジエーンは上を見た。如何に
も丈の高い人で、顔の道具が大きくて角々しく、
手足體形までもギクシヤクして固苦しかつた。

「ではジエーン、御前大人しい子かね。」

然りと答へる譯にも行かず——この子の周圍の人
の意見は其反對なので、——ジエーンは黙つて居
た。リード夫人は、殊更らしく首を振つてジエ
ーンの代りに答へた。而して言ひ足すには、
「プロツクルハーストさん、其點は、あまり仰ら

ぬ方が却て宜しいので。」

「それはどうも悲しむべき事ですな。この子に熟と言つて聞かせなければなりません。」

と言つて、垂直の態度を改めて、リード夫人に相對して肱掛椅子に腰を下ろして、

「此處へ御出でなさい。」

ジエーンは進み出ると、其人は彼女を自分の眞正面に立たせた。向き合つて見ると、何といふ顔だろう。大きな鼻で、大きな口、何てまあ悪い目立つ齒だろうと、ジエーンは思つた。

「不良な子供といふものは、世の中で一番なさいないもので、別けても不良少女は困ります。惡人は死ぬと何處へ行くか知つてゐるかね。」

「地獄へ落ちます。」とジエーンは、無造作に、正しく答へた。

「地獄といふのは何です。解るかい。」

「火の一杯燃えてゐる穴です。」

「御前は、その穴へ落ちて、始終燃やされてゐた

いと思ふかい。」

「いゝえ。」

「其處へ行かぬやうにするには、如何したらいい。」

ジエーン一寸考へた。

「身體を丈夫にして、死なゝいやうにするのです。」と思ひ付いて、答へたが、相手の氣に入らなかつた。

「どうして始終丈夫にしていられるものか。御前よりも年の行かぬ子でも、毎日のやうに死ぬ。

つい二三日前にも、五つになる子供の御葬式をしたが、その子は。善良な子でしたから、今は魂が天にいつてゐる。御前が、今此世を去ればそうはいくまいと思ふが。」

其人の疑念を晴らせ得る境遇でもないので、ジエーンは、敷物の上に頑張つて居る彼人の大きな足を見詰めながら、此處から抜け出して遠くへ行きたいと思ひ／＼、嘆息をした。

「その嘆息が心から出て、御恩になつたこゝの奥さんに、御迷惑を掛けたのを後悔するのだと宜いが。」

「恩人！恩人だとさ！皆が、リード伯母さんの事を私の恩人だと言ふが、もしほんとなら、恩人といふものは厭なものだ。」とジェーンは内心に思つて居た。

「御前、夜も朝も、御祈りをしますか。」

「はい。」

「聖書を讀むかい。」

「時々。」

「喜んで讀むかい。聖書は好きかね。」

「處々好きです。」

「詩篇は？あれは好きだろう。」

「いゝえ。」

「嫌い？呆れたものだ！私の子は御前よりも年下だが、詩篇を暗記してゐる。その子に、御菓子を上げやうか其とも詩篇の一節を覺えるかいと

尋ねると、「詩篇の方を。天使は詩篇を願ふでせう。私は此世の小天使になりたいから」といふ。それで、子供ながら信心深いのは感心だつて、却て御菓子を二つ貰ふやうになる。」

「詩篇は面白くありません。」とジェーンは言つた。

「それで御前の心の悪いのが分る。神様にその心を新しい清い心と換へ、石の心を取去つて肉の心を下さるやうに願はなくてはいけない。」

如何したらば心を取換へられるか問ひ質さうと思つてゐるうちに、リード夫人は、ジェーンに坐れといつて、自分が對話を續けた。

大阪の童謡

浪花の子守

何處にもある童謡と云ふものを少し研究いたして見たひと存じまして集めました。所が中に大阪の色彩を帯びたものも少なく御座いせんから他地方會員のお笑草に記載いたし御高覧に供します。

一、動作なしの部

一、朝はよ起きて寺町見れば海のないのに蛸がある。

二、郵便屋走りんか。もう。かれこれ十二時や。

三、行きしな運動會もどりしな。しんどう會。

四、雨が。チョボ／＼降る晩に。まめだが（狸の

事）徳利持つて酒買ひに。

五、先き行くもの酒屋の丁稚。あとから行くもの

狼狐。

六、天狗さん。もつと風吹いてんか。あまつたら返す。

七、一けん二けん三けん試験に。まけて落第坊主

（惡口）

八、お多福三福風が吹いたら、よ福。

九、大文字屋。おーはいり。頭が大きて。はいられん。横になつて。おーはいり。横になつたら。

こける。裏から廻つて。おーはいり。裏から廻たらはいられん。

十、烏カア／＼。かかのうち。やけた。はよ。いんで。水かけ。

十一、もー。いんで。こうよ。又あした。こうよ。

十二、喧嘩はおやめ。角力はおとり。

十三、坊主ぼつたい。はりぼつたい。（惡口）

十四、まねし。萬歳米貰ひ。一日あるいて。米一

升。

十五、まんかんさん。どうこへいく。ちよづいく。
はーまん。はーまつた。親の云ふ事きんかん
さん。

十六、五厘の。どんぐり目。

十七、おかん。こうり。つめたひ。こうり。こた
つへ。あたつて。ぬーくひ。こうり。

十八、正一いなり。大明神。お稻荷さんの事なら。

どこまでも下略(初午の際はたを持ち歌ふ)

十九、こうもり。来い。あんどに。かくれて。
傘きてこい。

二十、お月様いくつ十三一つ。そりや。まだ若い

躰方の準的

(神戸市保育會に於ける講習の一節)

文學士 檜崎淺太郎

編者言ふ。神戸市保育會にては昨年四月より毎月一回乃至二
回、京都より檜崎文學士を聘して心理學及教育學上の講義を

な。こんど。京へ。のぼつて。まもりの。せいで
おまんを。買つて。其おまん。どうした。(子
供の名)花ちゃん。たべて。しもた(これは
まだ種々あり)。

二十一、天神橋は。長いな。おちたら。こはいな。

二十二、あほに。ほがない。船に帆がある。ぱつ
ちに。底ない。船に底ある。

二十三、めくらーの。通り道。子供が。ゐてたら

のいてんか。

二十四。とつてん。かつちん。鍛冶屋の子。ぬく

く。ボツボテ。芋屋の子。

(つゝく)

乞ひ、聽講者に最深大なる興味と利益とを與へられつゝあり
此の『躰方の準的』は其の講義中の一部を神戸幼稚園保母前出

元枝氏の筆記により更に檜崎文學士の校閲を経、特に本誌の爲に寄稿せられしものにして、此の何人にも重要有益なる、講義を直接聽講者のみの利益に止めず、廣く熱心なる本誌讀者諸君に頒たれんとする神戸保育會の特別なる好意によるものなり。即ち誌して掲載を承諾せられし檜崎文學士、筆記者の勞及び、神戸保育會の好意を深謝するものなり。

一、教育上最重要の問題

學校教育又は保育の上に於て道德教育程重要にして最も困難なる問題は他にはありませぬ。多くの教育者並に父兄の方々が子女の教育に關して考慮を費して居らるるのは主として此問題である。

殊に我國今日の狀態は二千數百年來涵養し發達し來りたる國民思想が教育の普及と歐米文明の接觸とに依り少しく動搖を萌したるやの懸念があり之に對し識者は大いに考慮し研究して居る時代である。夫れ故に此問題は獨り教育者のみが解決をしなければならぬ問題でなくして實に日本の全國民が擧つて研究しなければならぬ最重要の問題であります。而して私が茲に其話しを致しますのも此

問題の解決ではなく解決に近づく可き正當なる考方と大切な材料を差し上げこれを手引きにして本問題を絶えず御考を願いたいのであります。

二、德育に關する從來の研究

教育に關する研究中最も進歩の遅いのは實に此方面である其遲々たることは我國も外國も同様であります。我國西洋とも訓練上の方針は何によりて定めたと申しますと先哲の意見と日常の經驗から割り出したものである。我國で訓練の仕方を誠に細かく考へて後進者に示したるは貝原益軒でありますが先生の訓練の基礎は支那の儒教と先生自身の經驗とから來て居る例へば、

- (一) 小兒の惡しくなるは父母、乳母、侍者が人の教への道を知らずして其の子の本性を害ふ故なり。
- (二) 小兒の時より暇なく艱苦に慣れしむ可し、人幼き時艱難に慣るれば年長じて艱苦に耐へ易し。
- (三) 小兒の遊びを好むは常の情なり道に害なきわ

ざならば強て抑へかがめて其氣を屈せしむ可らず。

(四)小兒十歳以内は賢愚知不肖未だ定らず十歳より十五歳に到る間に漸く分れ二十歳に到りて定まる故に十歳より内に早く教へ戒む可し。

(五)小兒を安からしむるには三分の饑と寒とを帶ぶ可し天氣好き時は折り折り外に出し風日に當らしむ可し斯の如くすれば肌堅く血氣強くなり風寒に感せず風日に當らざれば肌脆くして風寒に感じやすく煩多し。

(六)七歳より前は早く寢ね晏く起き食するに時を定めず大概其心に任す可し禮法を以て一一責め難し。

我國の益軒と時代を同ふして出ました英國のロツクの本を見ますと其中には訓練に關する貴き説を澤山含んでゐます。是れは氏が家庭教師をして居ました多年の經驗の結果から來たもので皆一一根據ある説で今日の訓練の意見と大差がない程進

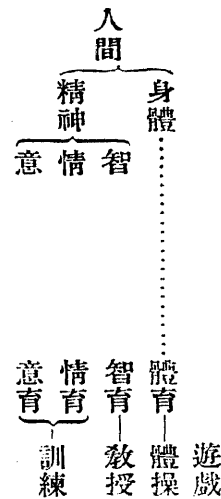
んで居る。

然らば訓練は研究の頂上に達して居るか。從來の訓練論は敬服し尊重す可き點は數々あるが極めて漠然として意義明白でない。學者とか思慮ある教育家がさうであるから一般の教育實際家の考は頗る不明な處がある。其上に近頃は新聞や雜誌に教育上の種々な新説が無難作に紹介せられ讀者亦之を無難作に受け容れるから其間にもとの學説とはとんちんかんのものに變化し、それが教育の實際にも幾分か影響して居る故に先づ吾等は德育を爲すに先ち德育の明瞭なる考を持たねばならぬ。

三、德育の意義

教育の目的を達しまする方法を工夫しますることを教育學の内で方法論と云ひます其方法は千種萬様でありますが之を心理學の見地からわけますと三つになります本來人間には身體と精神(智情意)とがあり之の各を充分に發達させますことを體育

智育・情育・意育と申します其内情育意育を總合して德育とか訓育とか又は訓練と云ひます。

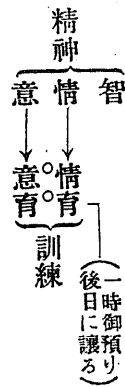


教授は主として直接に兒童の智識の上に作用し訓練は主として直接に兒童の意志の上に作用して教育の目的を達せんとするのである。而し之れは研究上考の上で別けて見るので實際は教授の際に訓練も行はれて居る。元來人の心を智・情意と云ふも實際は別れ別れに心にあるものではなく一つの統一體である。夫れ故に其一部に働きが起れば其影響は全部に擴がる度がちがう。教育者は眞に智識の教育をして居る時でも教師の態度。言語使用。表情等は兒童の感情を動かし知らず知らず兒童の情意に影響を與へて居る。智情意は水の如き

状態である水は分けければ酸素と水素とになるが實際は結合して居る。而して一點に波動が起れば全體に波及す。而し智情意を同時に考へると事柄複雑錯綜して到底物の道理事實の眞想を明白にし或は其事實を精密に分拆することが出来ぬから便宜上わけて考へるのであるこのとはくれぐれも御忘れなさぬ様に願ひたい。而して實行上には可成教授訓練體育を總合して同時に其目的が達せらるる様に調和統一することを要するのである殊に幼稚園では之れが大切に保育でなすことは何一つでもなすことが同時に體育にもなり智育にもなり訓練にもなる様な事が最も望ましい。保育の價值は此の度によつて定まる。

夫れ故に教授と訓練とは別物であると考へるは學究的に分析したる觀念を實地處辨の方に直に適用した誤見であるが而し其作用によつて智識の開發に効力多き場合を便宜上教授と云ひ情意の陶冶に効力大なる場合を訓育と云ふて差支へなし。

訓練と云はい感情、意志兩方面の陶冶を指示するのだが而し殊に意志を主とするのであるから茲には意育のみをお話をする之れも便宜上のことである。



意志の陶冶をお話するには意志とは何か。意志と感情、知識との關係を申上ねばならぬが之れは細かな心理學の講義になるので之れも後日に譲り茲では普通の意味に解し意志とは種々の慾望が起る其慾望の中より善良なるものを思慮撰擇し其撰擇したる慾望を實現するまでのものを意志と名づけたい。善良なるものを撰ぶ點で智識と關係がある其撰擇したるものを實行する時に於て身體精神の強き力を要する故に意志は如何なるものでもよいと云ふ譯でなく一定の意志でなければならぬ。

一定の意志とは形式的抽象的に考へれば善良にし

て強勢なる然も永續性の意志でなければならぬ。

之れは倫理學の理想である強力なる意志は餘り明白に倫理學では論じなんだが併し之れは論じないだけで已に預定せられて居つた。偕自然の意志には其性質から見て善良なるものあり不良なるものあり其強度にも強・中・弱の色々がある意志の續く長さから云ふも長短種々である。是等の内で教育上望ましいのは善良にして強く且つ耐久力のあるのである、教育に於ては斯の如き意志を發達させ他はおさへんとするのだから教育に絶對の自由などある筈はない。又善惡は大人からみて云ふので幼き兒童はよしあしを考へて居るものではなく又幼兒の意志に本來善惡のあるものでも無い。大人が一定の標準に照して善惡を別ち善を助長し惡を抑へんとするのである之れが教育であり又人の道である。

自然の道と人の道と異なる處はそこにある。春、夏、秋、冬と四季が變化し夏は暑く冬は寒いのは自

然である餓えて食を求め渴して水をのむのも自然である處が之を自然のうつるまゝに任せず夏は衣服を薄くし風通りをよくし冬は窓を閉ぢ爐を造るは人の道である。裸身で生れるのは天の道自然の道で之に衣服をまとゐ家を作りて生活するのは人の道だ。人の道を用ゐず自然に放任すれば田畑は荒れ雜草生ひ茂る。それでは人は生活出來ぬから米麥粟豆の生長を善として雜草の生長を惡として之を抜きとり焼きすてる之が人の道であると先哲も云ふたが教育も又之と同じだ。兒童の心には色々な萌芽無數に發芽し生長せんとして居る之が自然の狀態である無數の萌芽それ自身から云へば善惡は無い。田の中に稻や雜草がはえて居るが天當様が御覽なさつたらよしあしはない一樣に水と日光とを與へては生長を助けて居らるる蛙やどじやうが見ても稻と雜草とに善惡はない人間から云ふとそこに米は善でひえは惡となる之と同様に兒童の心に芽生えて居る色々な慾望活動には本

來は善惡はないが、而し兒童が從來生長して國民となり社界の生活をする時になつた時を考へてみると其色々な萌芽の内國民生活―社會生活に善なるものと惡なるものがあるそこで善なるものを助長し惡なるものを抑へるこれが教育である。善なるものを助長する點に於て已に放任を許さず惡なるものを矯正する點で絕對の自由活動は許されないのである夫故に「絕對の自由」などは教育の範圍では全くなしと考へなければならぬ。

斯く論じて來ますと今の新しき教育の一大特徴は兒童の自由活動を重すると云ふ點にあるが然らば之れは如何に考へたらよいか此の點に私の考には大なる矛盾がありはしないかと反問せらるゝであらう。勿論教育上の大改革は常に束縛の教育を破りて自由の天地を兒童に與へた處に存するので近世の大教育學者又は大教育家ルツソー、ペスタロツチ、フロエーベル、ヘルバルト皆其著しきもので其他瑞典のエレンケイ女史佛國のラコムズ氏な

ども之を大いに主張したモンテッソリー氏に至りても兒童の自由の尊重を強く認めたのみならず之を實行した。併し氏も一種の自然主義に立ちながら最後は理想主義に陥ち入つて居る兒童の活動は一つの自然現象であるから我々は飽くまで此の活動を尊重し大人の見地からする干渉を避けねばならぬと云ふのは全く自然主義の考で而してかくするが兒童が社會に適應するに好都合なりと考へた處は理想主義である。かくの如く是等の大家にも思想上の不明な處がある。自由活動の尊重は主として智育體育の範圍の教育上の主義とす可きもので訓育上にまで之を適用するは其主義の運用を誤つて居る。而し良き意味の自由活動、人が何と云はうとも理性のなす處に突進すると云ふ自由活動は訓育上にも大切だが自由放任主義の自由活動は德育上には禁物だ。智育體育上の主義を訓育にも誤用するのは胃病の妙藥を眼病にも大効ありと思ふと同様である。この區別を明確に頭にもつてい

たいきたい。そうしないと思想の混雜が起る教育上の主義と云ふも其主義の内には智育上のものあり訓育上のものがあり又體育の見地から定めた主義がある。

自由活動は智育の理想主義であつて體育にも大なる効能があるが訓育には直に適用が出来ぬ。自由活動を理想の様に思ひながら而し實際さうしてはどうも教育が出来ぬと考へらるゝのはこの區別を忘れて居らるゝからかも知れない。訓練上には自發活動主義の上に矯正主義を加味しなければならぬ寧ろ兩立して對當の地位を與てなければならぬ自由活動を尊重するモンテッソリー氏の如きも道德的方面に於ては自由を制限することを同意して居る。例へば他人の妨害になる事良き作法に反する事等は禁止す可きとして居る。兎に角兒童は生長して社會の風俗習慣に従ひ憲法に従ひ法律に従ひ規則を守らなければならぬ。英國の如きは此の習慣がよく養はれ巡査の命令すら非常によく行

はれて居るそうである。之れは小さい時から習慣によるの外はない。小さい時に善良なる習慣が出来れば善なることが極めて樂に出来る幼時の教育は實に其人の一生に非常な幸福を與へる。苦痛なくして善事が出来る様になる。而して一步あやまり良習慣が形成せられなかつた時は一生苦まなければならぬ。然らば善良なる意志とはどんなのであるかそれは全人類の幸福のために盡瘁せられたる意志である自分のためには人はつとめなくてよいかと云ふと全人類の幸福を謀ればそれが自分の幸福ともなる家内のものが一家のために働き一学校の職員が學校のために努力すればそれが自分の幸福になる今日の社會は不調和なところがあるから時には矛盾した事も起るが大體を見れば専心社會に盡す人は社會からも尊敬され愛せられて居る人の本性は自己のためにする力強い故に教育の力道徳の力を以て社會人類一般のために盡す様に手を加へなければならぬ。以上の論述により善良にし

て強力なる永續性の意志を鍛練することが訓練の目的であり教育の主要なる目的でなければならぬ而して之れは獨り私の考でなくして古來より今日に至る一貫したる教育上の理想であり目的である意力主義・意志鍛練主義最も勢力のある見識である。

四、意志教育に關する古今

學者の主張

今茲に一々人の名前を上げて其人の言説を申し上げるの必要もありませぬが上述の考につき諸君に自信を起してもらふためにすこしく辯明しなければならぬ。又他の考が出た時又他の異説が起つた時に御迷ひになることがある。知者は惑はずと云ふ處に進んでいないと實行上に確心が出来ない躊躇する様になる。

東西兩洋に於て意志教育の必要を鼓吹し又之を實行せるもの決して尠くありません之を西洋に見まするもスバルタ羅馬の教育は言はず近世英國の

教育につき十七世紀の末、即ち六百九十三年ロツク「千六百三十二年」一七〇四年」は六十一にして教育に關する思想を著し英國教育界に活動の指針を與へた其議論は苟も眞理にして正道と信せらるゝものは必ず之を實行せしめる必要を説き殊に實行に對しては往々異常の困難伴ひ來るを以て其困難を排し實行の先驅となる剛氣勇進の力を養成し加ふるに神を崇び人を敬するの心廉恥面目を重するの精神を涵養す可しと論述した殊に氏は幼時の教育の重要な事をたとへて幼兒の教育は大河の源泉に遡りて其水の流れに指を加へるが如き者だ其加へたる指の方向の僅かの差によりて末は萬里の相違を生ずると云ふて居る。之れは教育者の味ふ可き意味深き語であるロツクの考を受け續きたる人はトーマスアーノルドと云ふ人であるこの人はラクビーの學校長となりロツクの主張を實現し意志的實行的紳士を養成した今日英國人の性格は之らの教育家によりて造られたと云ふも恐くは過

言ではありませんまい。この人は人の一生は三分の一思考し他の三分の二は實行に費す可きものと云つて居る獨逸に之を見ますもベスタロツチ、ヘルバルト皆同一の傾向を有して居る殊にフイヒテは其代表者なるが之れは後ですこし深く御話する。現代の學者ナトルプ氏の社會的教育學に見るも氏は一種の意力主義の教育を鼓吹し教育なる働は教師と生徒の意志の關係から發生すると考へて居る。

ナトルプ氏は社會のために眞實に働き勇氣を以て一切の不正を排除する人物を養成するのが教育の目的なりとし之が養成は家庭學校社會の力を借らなければならぬと結論して居る。最近ではライ化學者オストワールド氏等も強烈なる意力ある人物を養成す可きも論じて居る。翻つて我國に之を觀るも我國過去の教育殊に鎌倉時代の教育は實に意力主義の絶頂を示して居る意力の鍛練は餘程爲し來つて居る明治以前の教育につきて何が最も成

功せりやと云はゞ意志教育である。大和魂は實に其結果である然るに數百年來培養せられて來た大和魂なる國民精神國民思想が明治の教育によりて如何になつたかと云はゞ遺憾ながら明治の教育は豫定の結果を収め得なかつた。善良にして強力なる意志教育に於て甚だ遺憾があつたと結論せざるを得ない。かかる結果は教育の罪のみではなく社會にもあるが教育が自覺的に此點に主力を注がな

んだことは事實である。大正の教育は此點に於て革新を起さなければならぬ。何故起さなければならぬかと云ふと之れは過去明治四十餘年間に於ける人心の變遷の現今の我國の狀態及び列國との關係から來るの。であるこの邊のことは私以上に最も適切にとかるる人があるが話の順序として梗概を申上て置く。

* * *

保育入門 (三)

三 幼稚園

倉橋 惣三

一

幼兒教育の第一の場所は、いふまでもなく家庭である。第一の幼兒教育者は、いふまでもなく母である。ところが、此の家庭が、事實の上に、自分だけでは幼兒の教育の完全を期し得ないと知る

時、そこに他の機關の必要が起る。幼稚園はすなはち此の補助機關の中の一つである。換言すれば、幼稚園は幼兒教育上家庭の補助をするものである。

而して、幼稚園が家庭にとりて必要となる意味、

場合、及び程度は極めて多種多様であるが、之れを大別して、多少救済の意味を含む場合と、純教育の場合とに分つことが出来る。

前者は、假令ば貧困者の家庭、夫婦外稼ぎの家庭等の場合であつて、主として經濟的事情から幼児教育上無能力乃至不充分者の場合である。此の際、個人的或は社會的に、之等の家庭の補助機關が與へらるゝことは、いふまでもなく最も必要である。殊に近世の如き生活窮迫の時代に於ては、此の點の必要が益々多くなる。

しかしながら、斯ういふ救済的意味を少しも含まない場合に於て、矢張り幼稚園の必要はある。詳しく言へば、經濟上の事情からも、母の家庭生活の餘裕からも、一通りの幼児教育は立派にすることが出来る。幼稚園へお願ひしなければ其の子の教育が全然出来ないといふ様なものでは決してない。母も亦自分の子の教育を他に托して、それだけの暇を食らうなどゝするのでは決してない。け

れども、幼児教育の完全のためには、どうしても家庭だけでは不充分である。幼児教育の理想の標準を低くして考へれば成る程家庭だけでも濟まされないことはないが、幼児教育の大切を考れば考ふるほど、幼稚園に通はした方がよい。通はし度い。通はせなければならぬといふことになつて来る。つまりは、幼児教育の大切なこと、その内容に關する智識、それに對する方法の六かしき等が家庭に明かになるに従つて、幼稚園の必要が次第に多く認められて來るのである。

(一) 蓋し幼兒の生活は、前に述べた通り(第一章、『幼兒の生活』)諸方面の教育を與へらるべく待ち設けて居るのであつて、此の自然の要求に適當な満足を與へないことは、第一、兒童の發達の上に大いなる不經濟である。幼兒の生活が、世間往々にして考へられる如く、何等の積極的意義をも有して居ない、たゞ／＼たはいないもの、學齡に達する迄は教育的に打ちすてゝ置けばよいもので

あるならば、幼児教育は何等必要のないものである。必要があると言つたにしても、消極的な必要に過ぎない。しかも、幼児の生活が、方に此の時期に於て與へられなければならない教育的要求を有して居るのであるから、幼児教育の必要は最も積極的なものである。

(二)而して、此の幼兒生活が要求して居る教育は極めて多くの内容に亘つて居る。その中、各自の家庭だけですれば出来ないこともない種類のものもあるが、家庭だけでは出来難い種類のものもある。假令ば幼兒の遊びな^いか^まの欲求、(第一章參照)、それから與へられる教育の如きは、家庭内だけでは出来ないことである。是に於て、家庭は自分だけでも出来ることを幼稚園へ頼むのでなくて、其の必然の缺陷を補つてもらふのである。

(三)家庭が自分だけですれば出来るといふ様なものゝ、それは多くは理想の話であつて、實際上總ての家庭が、その幼兒の教育を、各内容に亘つ

て充分に行ふといふことは、なか／＼以て容易のことでない。すれば出来るといふのと、いつでもして居るといふのとは必ずしも一つではない。茲に於て、幼稚園の理論上の必要の上に、事實上の必要が生じて来る。

(イ)前に述べた通り(第二章、『幼兒の教育』)幼兒の教育は一種特殊なるものである。殊に幼兒の發達の各方面に行亘つて手落ちのない教育を充分幼兒教育的に行ひ得るためには、可なりの知識を要し、また手際を要する。而して、之れを總べての母親に要求することは六かしい。學問のある妻君はある。家政に長けた主婦はある。社交に勝れた夫人はある。しかも夫等の良主婦が必ず皆幼兒教育上の知識に富むと限らない。母としての愛は必ずある。しかし母としての知識は未だ充分でない人も尠くない。如何にして幼兒の感覺、知覺に練習を與へようか。如何にしてその精神内容を整理し、組織的發表の練習を指導しようか。幼い

ながらに行はるゝ諸道德的感情を如何に培い養ふか。どうしても幼児教育専門の知識を有し、その熟練を有するものゝ補助を借らなければならぬ。

(ロ)殊に、幼児の教育を完からしめるために必要な諸般の設備用具の類は、家庭に於て完備を期することが六かしい。殊に此の頃の都會家庭などに於ては、子供のための遊び場を供してやることも六かしい有様である。田園家庭では、廣い遊び場には事かゝぬとしても、そう一家庭毎に我子のために多方面な完全な設備をするといふことは殆んど出来ない。茲に於て、幼児教育を専門とし、その教育を完ふするために必要な設備用具の完備を怠らぬように努めて居る幼稚園の補助を借りなければならぬ。

以上、斯う考へて來れば、幼稚園の必要は、一方には救済の意味の含まれた必要もあるが、又純教育的に普通一般の家庭のためにも、理論上事實上の必要のあるものである。

二

上述の如き必要から設けらるゝ我國の幼稚園は、小學校令施行規則によつて、其の教育の目的及び要旨を左の通り規定せられてある。

幼稚園ハ滿三歳ヨリ尋常小學校ニ入學スルマデノ幼兒ヲ保育スルヲ以テ目的トス（小學校令施行規則第百九十五條）

幼兒ヲ保育スルニハ其ノ心身ヲシテ健全ニ發達セシメ善良ナル習慣ヲ得セシメ以テ家庭教育ヲ補ハントトテ要ス。

幼兒ノ保育ハ其ノ心身發達ノ程度ニ副ハシムベク其ノ會得シ難キ事項ヲ授ケ又ハ過度ノ業ヲ爲サシムルコトヲ得ズ。

常ニ幼兒ノ心情及行儀ニ注意シテ之ヲ正シクセシメ又常ニ善良ナル事例ヲ示シテ之ニ倣ハシメンコトヲ務ムベシ。（同第百九十六條）

而して、此の目的及要旨に準據して幼稚園教育を誤りなからしめ、充分効果あらしめるために、種々なる保育上の實際問題が起つて來る。以下項を追ふて其の問頭に入らうとするが、そこに始めて幼稚園の本義が具體的に明かになる譯である。

フレーベル自傳

(第三回)

(マイニンゲン太公に宛てたる書翰)

倉橋惣三譯

十九、幸福なる三相の生活

叔父の家に滞在してゐた間の私の生活は三相を持つて居りました。私の道德的存在を進展させ、

築き上げてくれた宗教生活、私が全力を傾注しました子供らしい遊戲よりなる外的生活、及び平和な叔父の家に於て靜かに行うた思想生活であります。

私は又この最後の思想生活にも等しく熱心に努めました。而して斯る氣分に裏切る輕い矛盾に就いて少しも疑惑を感じませんでした。

學友と同じく私は有耶無耶に日を送りました。見たり感たりするだけなら少しも干渉を受けませ

んでした。而かも尙私は私達の中の誰でもが甚しい不屈な行爲をしたとがあつたとは思ひません。

二十、寛と嚴とに就て

茲に私は教育者として輕々に看過することの出来ない一事を記さなくてはならなくなりました。

私達は二人の先生に教へられて居りました。一人は街學的で嚴しうございました。も一人は主に私達のクラス、ティーチャーをして居られました。寛大で自由な人でありました。

嚴しい先生はクラスに少しも勢力がありませんでした。も一人の先生は私達と一緒に何でも好きなことはなさいました。而して若し先生が力を盡

さられたなら、又は若し先生が自分の力量を知つて居られたなら、先生は充分しつかりした善い教育をクラスに施されたかも知れません。

小さなスタッド・イルムの町には學校の監督をしてゐる二人がの牧師が居りました。

牧師長たる私の叔父は柔和で溫厚で日常生活に於ても教會又は説教壇に於ける如く親切で人を感ぜさせる所がありました。も一人の牧師は厳し過ぎる程嚴格で私達を叱り付けたり命令したりしました。

嚴しい先生は私達を恐れ眼をして導きました。先生の言語のあるものは確かに聞くに堪えない位亂暴でありました。

私達を叱り付ける牧師の長い訓誡は大部分何物をも残さずに私達の頭の上を過ぎて行きました。

叔父は私の父と同じくその羊の群の牧者でありました。けれども叔父にはすべての人々に對する溫和な愛寵的親切がありました。

私の父はその行爲の公正であるといふ確信に意を安うして居りました。父は熱心で厳しうございました。

二人とももう二十年も昔に死んで居ります、けれども二人がその教會の會衆に残して行つた精神は甚麼に違つてゐる事でせう。

教會の人々は峻嚴な支配から逃れてゐられるのを喜んで居ります。而して私の聞いたことが本當であつたとすれば、束縛されざる自由が人々の間に飛びまわつて居ります。

小さな町は漸次向上して輝^{かがや}かしい未來に進んで行きます。而して事々物々は皆精神修養のため並びに正しい市民にふさはしい商業的活氣の爲めに資せられて居ます。

私はこの岐路に入つた記述を自ら承認します。何故ならば是等の事柄の結果は私自身の生活に於ける經驗と平行してゐるからであります。

斯うして私は堅信禮になるまで育つて行きました。長い休暇の間私が両親の家で過したのとはたつた數週間に過ぎません。

両親の家でも亦すべてのものが溫和に傾いて行き、而して家族的な膨脹的な活氣が家内を充たして行くやうに見えました。而して時々歸宅しては私は常にすべてのものに新しく刺戟されて非常に有益な効果を受けるのでありました。

先づ第一に私の目に附いたのは父の圖書室にあつた銅皿の彫刻です。その中でも特に世界歴史の繪を現したものであります。我國(獨逸)のアルファベットと他の國のアルファベットとを對照させてある表は私に驚くべき印象を與へました。それは私に我國の文字はフェニキア文字から結合され又引出されたものであるといふことを認知させてくれました。これは私が屢々聞いた又印刷されたのを見た外國の言語(私の兄弟は外國語を習つて居りました、而してその時分もまだ習つてゐたの

です)の關係に對して臆氣な概念を與へてくれました。殊にギリシャ語は私にはあまり目新しくなくなつて來ました。といふのは私はギリシャ文字を獨逸のアルファベットの中に認めることが出來たからであります。

併しながら以上のことはすべて私の生活の上に急激な影響を及ぼしたものではありません。是等のことはたゞ私の少年期の反映として後年に至つてそれ々の結果を私の上に齎したのであります。

二十二、サミュエル、ローイルの指輪

この頃に又私は男子の讀むやうな本はすべて讀みました。サミュエル、ローイルの話が一番はつきりと頭に残つて居ります。私も亦私の手につまらないことをさせないやうに穿めてゐる指を壓してくれる指輪が欲しいと思ひました。而して私はこの話の指輪の若い所有主を憎みました。疳癬な行爲をしたいと思つた時に彼の指輪が彼の輪を強く壓した爲めに彼はその指輪を棄て、了つたのであ

ります。

二十三、就職問題

叔父さんがすべて取扱つて下さつた私の堅信禮及びそれに對する準備は終りました。

私は堅信禮から私の全生涯に於て最も感銘的な又最も遠大な影響を受けました。而して私のすべての生活は堅信禮に於てその聯結點と休息點とを發見しました。

私は今では就職の準備をしなくてはならなくなりました。而して問題は起りました。何の職業に従ひませうか？

私が大學で學ぶことが出来ないといふのはもう餘程以前から繼母の決心に依つて決められて居りました。何故ならば二人の兄さんは既に學事の研究に身を委ねて居りましたから父の財産に取つてはその上更に多くの費用を出すことは尠からぬ負擔であると繼母は思ひました。

此の意向が既に私の教育の全課程に影響を及ぼ

し又それを制限して了つたのかも知れません。そして多分未來の實業的の目的に向つてホンの少しばかり狭い範圍が考へられてゐたのでせう。私は未來の人として尊敬されてゐなかつたのです。

多分この理由からでせう。私はホンの少ししか羅句語を習はされませんでした。よく人々の言ふやうに名詞の變化さへ覺えれば充分だとなつてゐたのです。

自分の經驗から推して見ますに、たい未來の活動のある範圍とか生活のある地位とかばかりを考へるのは教育上甚だ有害であるやうに私には思へるのです。

骨の折れる舊式な教育（ある特殊の一目的のために行はれる）は常に人間性の多くの高尚な能力を眠れるまゝに過させて了ひました。

二十四、職業の選擇

我國に於ける富豪や志慮深い両親がその息子のために選ぶ生涯は出納局と大藏省に職を保つこと

であります。

斯る職に對する志望者はこの生涯に入つて行く二つの方法と二つの出發點とを持つて居ります、出納局が大藏省の小官吏の一人の書記になるか左もなくば高給官吏の一人の給仕になるのです。

私の書いたり計算したりする智識は斯る職に就くに充分であると父は思つたらしいのです。而して斯る職は金錢上の心配をしくともよいやうな生活に導くばかりでなく、財産や好運にも導くものであるといふことを父はよく呑込んでゐましたので私にこの生涯を選びました。けれども若い者を雇ひさうな大藏省の小官吏は私をまだ書記としては使ふことが出来ないし又使ひたくないといふ種々の理由を明かにしました。

私の記した斯る生涯に入つて行くための第二の仕方に對しては何だか私の心の中に反對するところのものがありました、私がその後経験したことのない或物があつたのです。けれども當時それは

未來の職業に就かうとするのに這麼出發をすることを絶對的に私にさせませんでした。そして最も誘惑的な希望が私の前に提供されてゐたにも係らず私はさう思つたのでした。

父は私のことをよく且つ正直に話したのですが運わるく思ひ通りに行きませんでした。

後年私が學校の先生をしてゐる時のことでした思ひ掛けなくも私は父が私を住み込ませるつもりでゐた官吏の甥の二人を教育することになりました。私がこの人々の叔父さんの衣物や靴にブラシを掛け又彼のテーブルに旨い匂のするお皿を並べるよりも是等の若い人々の心や頭を優良にして且つ有益な觀念を以て充たすことによつてこの一家のためにより大なる奉仕を爲し得たことを神に祈願します。

後者の場合に於ては私は多分外部的に氣安な幸福な生活を送ることが出来たかも知れませんが、ところが私は今絶えず心配や困難と戰つて居りま

す。

この生涯は私には閉ぢられて了つたといへばそれで澤山でせう。第二の生涯は母によつて言出されました、けれども父が斷乎たる不賛成を唱へて私をそれから免れさせてくれました。

二十五、農業家志望

私の自身の願望や嗜好が今や遂に議せらるゝやうになりました。私は正真正銘の農業家になりたいたと思ひました。何故ならば私は山や野や森を愛しました。而して私は又この職業では何でもしつかり覺えるためには幾何學と測量術とに通曉してゐなくてはいけないといふ事も聞き及んで居りました。

折節思ひ出したやうに測量術を習ひますのでそれに就てもつと多く知りたいといふ希望が大層私を喜ばせました。而して私は林學、農業、幾何學、測量術の内孰れから始めるべきかを些とも意に介しませんでした。父は私のためにある地位を探さ

うと試みました、けれども農夫達はあまり多くの歩合を要求しました。

丁度この頃父は測量家として又評價者として令名ある一人の林務官と懇意になりました。

父と林務官とは直きに約束を決めました。而して私は林學や評價法や幾何學や測量術を習ふために二年間この人のところに使はれることになりました。

二十六、林務官見習生

私が林務官の見習生となつたのは一七九七年の夏至の日で私が十五年と少しの時でありました。

私の家から林務官の家まで行くには二日かゝります。何故ならば林務官の居つた所は私達の國の内にはなかつたのです。

林務官は屢々彼の徹底的な多方面な智識の確證を私に與へました。けれども林務官は自分の智識特に實際上の經驗によつて得らるゝ智識を他人に移す術を知りませんでした。その上彼の信頼され

て居る材木流しの仕事は私の教育に要する定められた時刻に彼をして私を教へることを得ざらしめました。

この様子を明かに見て取るや否や私の心の活動は私の讀むに任せてある林學や幾何學の眞の良書を善用すべく促しました。

私は又近くの小さな町の醫者と知合になりました、その人は慰みとして博物學を調べて居りました。そしてこの友が私に植物學の本を貸してくれました。私はそれに依つて森に生えてゐる以外の植物に就ても併せ學びました。

林務官の留守中（その時は私は全く自分の氣儘になるのです）私は私の時間の大部分を私の住つてゐる附近の地圖を拵へることに捧げました。併し植物學は私の特別研究したものであります。

林務官の見習生としての私の生活は四重生活でした。第一に以前よりも家庭的な且つ實際的な側の生活がありました、それから自然殊に森の自

然と共に過した生活、それから數學と外國語の勉強に費した研鑽の生活、それから最後に植物に就ての智識を得るために費された時間でありました。

二十七、内省的青年

私の選んだ職業と私の地位の諸種の事情は私をしてあらゆる種類の人々と接觸せしめてくれました、けれどもそれにも係らず私の生活は依然として引込思案で獨りぼつちでありました。

私の敬虔な教會生活は今や敬虔なる自然との交通に變つて行きました。そして最後の半年間は私は全然植物を友として生活しました。植物は私が猶植物界の内的生活に就て何等の考もなかつたに係らず容易く私を自分達の方へ引寄せました。

植物の標本を集めたり乾燥したりすることは私が非常に熱心に行うた仕事でありました。

それから又この時代の私の生活はあらゆる方面に於て自己教養や自己啓發や道德的進歩に捧げられました。殊に私は自己觀察及び内省的慣習に耽

るのが好きでした。

二十八、芝居見物

私は私の内的生活の見地からして重要なもう一つの出来事をまだ記さねばなりません。

その時分私が住んでゐた所から一時間ばかり歩いて行くと小さな田舎町がありました。

田舎廻りの役者の一隊が其處に到着しました。

而して町の公子の城内で芝居をしました。私は彼等の芝居を一度見て後は彼等の所演に殆ど毎回缺かさず見に行きました。

是等の芝居は私に深奥明確な印象を與へました。而して私は私の心靈が長く餓えてゐた滋養物を遂に得たのであると感ずるやうになりました。

斯くして得たる印象は時が経てば經つ程私の自己修養の上に多大の影響を及ぼしました。

芝居へ行つた度毎に暗の夜や星の夜の一時間の歸途の途次、狂言の意味をよく咀嚼するため芝居で聞いて來た科白を要點だけ繰返して見まし

た。

特にイフランドの「獵人^{ハンター}」の芝居は甚麼に深く私を感動させたかといふことを私は覺えて居ります。そしてそれは如何に私を道德的決意を以て刺戟したこととせう。私はこの決意を星の光の下で私の心に深く鏤りつけました。

私の芝居の興味は私に役者、殊に私の注意を惹いてゐた眞摯な若い男と知合になりたがらせました。而して私はその男と役者といふ職業に就て話しました。私はその男が人々の心に向上的の感情を湧立たせることの出来る團隊の一員であることを喜んでやりました。而して多分私も斯る團隊の一員になりたいといふ希望を現したこと、思ひます。

すると正直なその人は華美な虚偽多き不幸としての役者の職業を説明してくれました。而して彼は仕方がなく役者をしてゐることや、彼は間もなく役者をやめるといふことなどを殘らず私に話し

ました。私はこれに依つて更らに原因を結果から分離し、内的の事物を外的の事物から引離すべきことを知りました。

私の芝居へ行くといふことは最も不快な経験を私の上に齎しました。何故ならば私が少しも隠さずに芝居へ行くことを父に話した時に父はひどく私を叱責したからであります。

父は私の行爲を最も嚴重な叱責に相當すべきものと思つたのですが、私の意見はこれとは全然相反して居りました。何故ならば私は芝居へ行くことによつて受ける利益を教會に出席することによつて受けるものと同様に思つてゐたからです。而して父にも斯る意味のことを話したのです。後年に於ても屢々さうだつたのですが、この時も父と私をの仲裁者となつたのは私の最長兄でありました。

二十九、林務官の苦情

一七九九年の夏至の日に私の見習生としての生

涯は終りました。

私の實際上の智識を今や自分のために役立てることの出来る林務官はもう一年私を引止めたいと望みました。けれども私はその頃にはもつと高尚な意見を抱いて居りました。而して私は私の目的から控えてゐることは出来ませんでした。

私の見習生の生涯が終つた時、私は林務官の手許を離れて父の家へ歸つて行きました。

私の主人は私に對してなすべき事をしなかつたといふことをよく心得て居りました。而して多分自分に對しても恥かしい意識を持ちながら而して又私に充分に満足したといふ感謝狀をくれたにも係らず、彼は私に對して甚だ卑劣な行爲をしました。

彼は私の人目に立たぬ研鑽、例へば私がよく理解することの出来たある基本的の數字書の熱心な研究などに就て何も知りませんでした。その他私がもう一年彼の許に止まらうとしなかつたとい

ふことが彼に喜ばれなかつたのです。それ故に彼は私の父に手紙を送りました。彼はその手紙で私の行爲に就て痛く苦情を言ひました。而して私が職業に就て何等の智識をも得なかつたといふ責を全然私に嫁して了ひました。

この手紙は私が家に歸り着く前に既に到着して居りました。而して父はこの手紙を私の最長兄の詐へ送りました。最長兄は私が歸宅の途次通り過ぎる村の牧師をして居つたのであります。

私が兄の家へ着くとすぐ兄はこの私を罪する手紙の内容を私に傳へてくれました。

私は私の主人の道心の鈍い振舞を暴露したり又私の自習したことなどを話して私自身の證明あかしを立てました。

私はそれから私の主人に返事を書いて送りました。彼の求罰のすべてを明瞭に論駁すると共に一面に於て私に對する彼の行爲を明かにしてやりました。而してこれを以て私は父や兄の意を充たし

ました。けれども兄はそんな不法な仕打を長い間不平も言はずに受けてゐたことに就て私を叱りました。この事に就ては私は簡単な答辯をなしました。それは父が私が見習生となつて行く前に何か不平を言つて歸つて來ても聞き屈けないのみならず、不都合なことであると思ふぞよと私に言つたからであります。

父の嚴しさ及び斯る場合の父の思わくを知つてゐる兄は何も言ひませんでした。けれども母は林務官の言分の中に私に對して抱いてゐる自分の意見の確證を見出しました。

林務官は若し私が何事をか成し得るとすればどんな人でももつと尠い勞力で同じやうな好運を贏るであらうと言ひました。而して母は心から此の説に同意しました。

フレーベル會規則 (抄)

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置リ

第三條 會員タルラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノトス

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ提出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一、總會、毎年十月之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品

幼兒成績物展覽、會務ノ報告等ヲナス

一、常會、毎年二月、六月、ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演

說、談話、協議、實驗等ヲナス

尙毎年四月廿一日特ニフレーベル紀念ノ爲メ會ヲ開キ

一、組合會、會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組

織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承諾ヲ經ルモノトス

一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

本會々々長

中川謙二郎

本會幹事

(イロハ順)

井村 くに

池田 トヨ 芳賀 晴

本會評議員 (イロハ順)

坂内 ミツ 和田 實 和 田 くら
武井 綱枝 岡部 やす 倉橋 惣三
安井 哲 福田 ふく 小向 きみ
雨森 銅 坂井 ふで

本會客員 (イロハ順)

乙竹 岩 遠氏 吉田 熊次氏 田中 ふさ氏
野口 幽香氏 横山 榮次氏 藤井 利譽氏
下田 次郎氏 日田 權一氏
伊澤 簡二氏 廣谷 季雄氏 岩谷 英太郎氏
波多野 貞之助氏 細川 潤次郎氏 本間 辰藏氏
戸野 周次郎氏 大瀬 甚太郎氏 奥好 義氏
尾田 信忠氏 大久保 介壽氏 嘉納 治五郎氏
唐澤 光徳氏 谷本 富氏 高島 平三郎氏
棚橋 源太郎氏 多田 房之輔氏 田中 敬一氏
中島 力造氏 中村 五六氏 野尻 精一氏
野上 俊夫氏 黒田 定治氏 久留島 武彦氏
松本 亦太郎氏 松本 孝次郎氏 馬 上 孝太郎氏
富士川 游氏 小西 信八氏 淺岡 一氏
窪部 顯宜氏 櫻井 光華氏 三島 通真氏
篠田 利英氏 東 基吉氏 瀬川 昌善氏
尺 秀三郎氏 菅原 教造氏

幼 稚 園 用 品

家 庭 用 玩 具

東 京 九 段

フ レ ー ル 館

新築後工場も整頓致し店も精々片付申候間益々
業務に奮勵仕り物品を精選し格價を最も低廉に
需に應じ可申候に倍舊の御愛顧を願上候

日 本 玩 具 研 究 會 會 員 募 集

會費は一ヶ月五拾錢にて研究した面白い御爲めになるよい玩具が毎月得られます(申込次第規則書送る)

本 會 評 議 員

巖谷 小波	甲賀 藤子	吉田 熊次
多田房之助	野口 ゆか	倉橋 惣三
黒田 定治	久留島 武彦	山脇 春樹
町田 則文	小西 信八	三土 忠造
三輪田 元道	莊司市太郎	森村 開作

本 會 幹 事

稻垣 知剛	和田 實	河野 清九
高市 次郎	曾根松太郎	武藤 忠義
野村 忠寛	松田 茂	藤五代 策
岸邊 福雄	御園生金太郎	

申込所 東京九段 日本玩具研究會